

身延山における日蓮聖人

——弘安二年の春から夏へ——

上 田 本 昌

一、弘安二年の正月

弘安二年（一二七九）己卯、宗祖は五十八才の正月を身延の草庵で、心しずかに迎えられた。前年に発した病は、一時恢復するが、完治し切れずむしろ慢性化して、健康状態は必ずしも好調な時ばかりではなかった。

また此の年は、先きに宗祖が予言された他国役遍の難について、すでに「文永の役」があつた後を受け、再び異国の来襲が予想され、元の使者周福らが来たが、幕府はこれを博多で斬り、世上の不安はつる一方であつた。⁽¹⁾このため異国降伏の祈願が各地の社寺で催されたりした。また北条時宗は加賀熊坂庄を東福寺に寄進し、後深草・龜山の兩上皇は、睿尊について受戒するなど国内の政界・宗教界は対策に苦慮しつつ、慌しい日々を送っていたのであつた。⁽²⁾

こうした中で、早くも身延入山五年目の正月を西谷で迎えた宗祖のもとへ、餅九十枚と薯蕷^{やまのいも}五本が上野殿から、三日のひつじの時（午後一時〜三時頃）に到着した。駿河国富士郡上野郷を出発した使者は、正月三ヶ日の中に西谷へ着くべく、特に正月用の食糧を用意して、險難惡路を訪れて来たのであつた。その御礼状によると、「この兩三年は

日本国の内、大疫起りて人半分げんじて候上、去年の七月より大なる飢渴^{けがく}にて、里市^{さとち}のむへんものとの山中の僧等は命存じがたし⁽³⁾。」とあるので、二、三年続いて起った悪性の流行病により、骸骨路に充てりという状態を呈し、更に昨年の七月以来飢饉に襲われて、里・市の数多くの人々、及び山中の僧達までもが、命をつなぐことが困難であったというのである。

こうした窮乏の状態について、その原因を、「日蓮は法華経誹謗の国に生れて观音王仏の末法の不軽菩薩のごとし（乃至）王もにくみ民もあだむ。衣もうすく食もとほし。」と述べている。王民共に法誹の国と化したことにより、日本中が大疫・飢渴に悩まされる結果となつて、日蓮自身もまた不軽や覚徳比丘のような忍難の立場に置かれているものである、としてゐるのである。迫害を受けながらも礼拝行を続行した不軽菩薩の如くであるというのは、宗祖自身⁽⁴⁾が立止（法華経）によつて、安国（仏国土）を実現しようと努力しているにもかかわらず、種々の法難迫害にあつて来たこととの対比であり、衣・食の乏しい現実も、所詮は正法誹謗の国に生れた「法華経行者」の体験しなくてはならぬ一つのプロセスとみなし、不軽や覚徳の「杖木瓦石、而打擲之⁽⁴⁾」という迫害と同じ立場にあるものとみなしていることがわかる。

さて、八日後の十一日には、上野郷主から二十枚の餅が、西谷の御宝前へ捧げられている。その礼状は一枚の短文であるが、宛名は「上ののがうす等のとのばら」となつてゐる。従つて相手は一人ではなく複数であつたろうと考えられる。文中にも「今の檀那等は」とあるのを見てわかる如く、上野の郷主等何人かが奉納して来たものであるといえる。また「もちゐを法華経の御宝前にささげたり。後生の仏は疑なし。なんぞ今生にそのしるしなからむ⁽⁵⁾。」という文面から推して、かつては浄土往生の信仰を持っていた者等であつたろうと考えられる。故に法を中心とした後

生の成仏を説き示しているが、今生に於ても何等からの「しるし」が現れて来るであろうことを認めている点から、やはり「現安後善」を説示されたものとみなしえよう。⁽⁶⁾

二、弘安二年の春

二月に入ると間もなく二日に、四条金吾の夫人である日眼女が、教主釈尊一体三寸の木像造立を行い、そのための供養として驚目を送って来た。これは日眼女が三十七才の厄年を迎えたので、釈迦仏を造立して加護を得ようとしたためのものであった。その折りの御返事であるが、往時は厄年も現在と異り、女性三十七才の厄があったものと考えられる。四条金吾は先きに建治二年七月にも釈迦仏の木像一体を造立し供養しているが、今回は妻日眼女の造立である。仏像の造立が夫妻でおこなわれたという点からみても、四条氏の信仰が如何に深いものであったかを知ることができよう。御書には先ず「御守書きてまいらせ候。」⁽⁸⁾とあり、木像本尊の造立に当り、「御守」が書き与えられたことに注目すべきである。これは「法華經、壽量品云、⁽⁷⁾」という次の文から推して、「守護の曼荼羅」を意味するものとも考えられる。東方の善徳仏や中央の大日如来を始め、三世諸仏、上行菩薩等、文殊舎利弗等、大梵天王、日月明星、天照八幡等の諸神の名が挙げられ、「其本地は教主釈尊也。」としている。曼荼羅に名目をつらねている諸仏諸神は勿論、その他の諸仏の名を挙げ、その本地を示す形をとっているが、木像の造立に当り曼荼羅を授与して、その木像がまさしく「教主釈尊」たることを証し、「壽量品の仏」として認められるものであることを明らかにするためであったろうと考えられよう。即ち、造立の釈尊は単なる釈迦仏ではなく曼荼羅の前に奉安することにより、諸仏諸神の本地開顯された教主としての釈尊であることを証するための裏付けとなるものであり、曼荼羅の前に奉安されること

により、開眼されたことにもなるという意味を含んだものとも解しえよう。従つて、「釈尊一体を造立する人は十方世界の諸仏を作り奉る人なり。」という意義を持つことになるのである。曼荼羅のことを「御守」と称する用例は建治元年八月の『妙心尼御前御返事』、文永十年八月の『経王殿御返事』等にも見ることができよう。

また方便品の「若人爲^レ仏故、建立^ニ諸^ニ形像^一、刻彫^{シテ}成^ニ衆相^一、皆已成^ニ仏道^一」の文を釈して「文の心は一切の女人釈迦仏を造り奉れば、現在には日々々々の大小の難を払ひ、後生には必ず仏になるべしと申す文也。」と述べ、更に日眼女が厄年のために祈願したことは今生の事のように思えるが、教主釈尊を造立したことにより、同時に後生も疑いなきものである、として「現安後善」が説かれているのである。要するに宗祖は、釈迦仏の造立を認め、曼荼羅の前に奉安することによって、その造立仏が本地開頭の教主釈尊であるとみなし、それによって現安後善の功德がえられることを主張されているのである。この現安後善は「身はこれ安全にして、心はこれ禪定ならん」という『立正安國論』以来、一貫した宗祖の理想であり、この事は又仏の究極の目的であつたと解しえよう。

尚、また宗祖は身延山にあって、庵室には常に立像の釈迦仏を祀り、その前に法華経を奉安して、朝夕読誦しておられたことから考え、釈迦仏の前に法華経を安置することにより、その仏が本門寿量品の教主釈尊であることを示すためのものであつたと解しえよう。日眼女の場合も同様の意義を持ったものといえる。即ち曼荼羅の授与は、一つには造立の仏が寿量品の教主たることを示すため、二つには「現安後善」の「お守」として、書き与えられたものと考えられるのである。

次に二月二十一日付の『孝子御書』がある。これは真蹟二紙を残す断片であるが、『録外考文』によると、「賜武州宗仲之弟兵衛志之書也」⁽¹⁰⁾としてゐる。御書は初めに「御親父御逝去の由」を記し、兄弟で法華の大法を信用し、

親父から度々の勘当を受けたが、ついに父の勘気を解き「前に立ちまいらせし御孝義」を賞し、「あに孝子にあらずや」⁽¹¹⁾と述べている。末法に法華經を信用する者には、悪鬼が怨をなす事は疑いなきことであるとし、これを耐え忍んだ兄弟は淨藏・淨眼か又は藥王・藥上にも比することのできる者であるとし、終りに「兄弟の御中不和にわたらせ給ふべからず、不和にわたらせ給ふべからず。」と重ねて訓誡している。父を失った兄弟に対して益々法華信仰に精進し、一致協力すべき旨を教示されたものであるといえる。池上兄弟については、兄の宗仲は一途に法華信仰に入っており、堅固な心を持っていたが、弟の兵衛志宗長も兄と共に入信したものの、父や兄の間に入って悩みの多い心情であったようである。故にこの御書の中でも、「貴辺の御事は心の内に感じをもう事候。」とあって、弟の心情をよく推察されているところがみられる。こまやかな心の動きをとらえることができる。また宗祖は二月に「釈子日目」と「妙心」に、それぞれ曼荼羅を授与されている。日付は兩軸とも不明であるが、この頃、西谷との交流があったことは確かである。前者は桑名の寿量寺に、後者は中山の淨光院に、各真蹟が保存されている。⁽¹²⁾

さて、西谷に春が訪れ、陽光の輝きが増す三月月上旬、二十六日には故松野六郎左衛門の妻から書信が届き、その御返事が記されている。松野氏はすでに世を去っていたので、その妻は後家尼といわれていた。真蹟は伝っていないが、身延行学朝師の写本がある。文意は安樂行品の文を引き、又八一眼の亀Vの譬を用いて、法華經に値うことの意義を説いている。更に弥陀念仏と法華經の題目を比較し、「日輪と星との光くらべのごとし」⁽¹³⁾と述べ、この道理をわきまえぬ邪見の者が国中に充満し、讒訴・罵詈・刀杖の難を加え、度々流罪に値ったが、これは勸持品の「經文にすこしもたがはず。されば涙左右の眼にうかび、悦び一身にあまれり。」と値難による經文色説の法悦を表明している。値難によって身命の危険が、常につきまとうことになるが、「三宝の御助にあらずんばいかでか一日片時も持つべ

き。」と謗法の徒によって生ずる迫害から身を守るためには、三宝諸天の御守護がなくては、片時と雖も身命を持つことができないとして、三宝守護を値難と同時に期していたことがわかる。これは『撰時抄』の結文と一致するものであり、宗祖の持っている八法華經行者守護に關する一つの考え方を知る上で、大事な一文といえよう。その上に「未だ見参にも入らず候人の、かやうに度々御をとづれのはんべるはいかなる事にや、あやしくこそ候へ。」とあるので宗祖はこの尼とはまだ対面したことがなく、文書の上での交際であつたことがわかる。尼は度々文を西谷へ送り教化に浴したり供養をしたりしていたようである。「法華經の第四の卷には、釈迦仏、凡夫の身にいりかはらせ給ひて、法華經の行者をば供養すべきよしを説かれて候。釈迦仏の御身に入らせ給ひ候歟。」とあるので、尼の外護の度合や篤信の状を案ずることができよう。同時に又、一度も逢つたことのない信者に対しても、懇篤なる教化が施されていたことを思う時、教化の在り方について、一つの在り方を学ぶことができよう。

次に四月には、釈尊降誕会を期して八日に、「日向法師」と「優婆塞日田」に宛た曼荼羅が書かれている。更に日付は不明であるが、同じく四月に「比丘日弁」へ宛たもう一幅の曼荼羅もある。⁽¹⁵⁾『高祖年譜』によると、「朗向二子」に授与されたことにもなっている。⁽¹⁶⁾

また『上野殿御返事』が、「卯月二十日」付で記されている。これも行学朝師の写本がある。『考文』によると「称杖木書」、親書在_三于身延、或弘安五年。古来為_レ賜_三南条七郎次郎、未見_三所出_二とあり、『本満寺御書』(第九冊九十三)の奥書には、「御正筆身延山に在之」とあるので或いはかつて親書が身延に存在したものと考えられる。

『境妙庵目録』によると、弘安五年の御書としているが、今は『定本』の系年に従うことにしよう。富士の上野、南条時光に宛た書簡であるが、时光は南条兵衛七郎の長子である。父の七郎は早くから宗祖の教化を得ていたが、文永

二年に病歿したあと、母と共に深い法華信仰の念を燃やした。西谷の宗祖へしばしば御供養の品々を届け、外護の丹精を抜kindでた一人である。弟に七郎五郎がいるが、兄と一緒に信仰心篤く、男の能の備はり将来を期待されたが惜しくも弘安三年九月に若干十六才で世を去る。(詳しくは後に弘安三年の項でふれることにする。)

「杖木書」といわれるように、この御書は「抑も日蓮種々の大難の中には、竜の口の頸の座と東条の難にはすぎず⁽¹⁸⁾」と不自惜身命の忍難弘経について述べ、勸持品の「二十行の偈は日蓮一人よめり⁽¹⁹⁾」とあって、『開目抄』で究明した⁽²⁰⁾「法華経行者」の一段と共通している。「又涌出品は日蓮がためにはすこしよしみある品也。其故は上行菩薩等の末法に出現して、南無妙法蓮華経の五字を弘むべしと見へたり。しかるに先日蓮一人出来す。」とある如く、勸持品と涌出品との関連を求め、⁽²¹⁾「弘使上行」たることへのよしみを持たせている。更に提婆品を挙げて「一経第一の肝心なり」とし、「竜女が即身成仏あきらかなり。提婆はこころの成仏をあらはし、竜女は身の成仏をあらはす。一代に分絶たる法門也。(乃至)法華経にかぎりて即身成仏ありとさだめ給へり⁽²¹⁾」と竜女と提婆の成仏によせて、法華経の即身成仏を説いている。末文に至って「とにかくに法華経に身をまかせ信ぜさせ給へ」という結論も、『開目抄』の「善に付け悪につけ法華経をすつる、地獄の業なるべし⁽²²⁾」と同じ意義を持った言葉として解しえよう。

また「自他の生死はしらねども、御臨終のきざみ、生死の中間に、日蓮かならずむかいにまいり候べし。」とあるは、先きの即身成仏説による⁽²³⁾「現安」に對し、爰では臨終正念による⁽²⁴⁾「後善」を期されたものといえる。若し臨終の時が来たらば、日蓮が必ずむかに参り、靈山浄土へ誘入しようという意味であろうから、靈山往詣を意味する一説といえる。

さて、この御書の三日後には、四糸金吾に宛た『陰徳陽報御書』が執筆されている。断片二紙の短文で、後半しか

伝っていない。主人に對し又皆人に對しての振舞いに注意すべきことを説き、陰徳を積むことによって陽報が現れ、所領もかさなり、大果報をうるに至ることを説いている。「上に申す事は私の事にはあらず。外典三千、内典五千の肝心の心をぬきてかきて候⁽²³⁾。」という末文から推すと、この御書の前半には、恐らく内外典の文を引き、四条氏への教化と、日常の在り方などが詳しく記されていたものと考えられるのである。四条氏宛の御書には、この種の型式による書簡が多く、宗祖も特に氣をつかっていた檀越の一人であったといえよう。

三、弘安二年の夏

月が變つて五月に入ると、二日に新池殿から米三石が送られて來た。新池殿については、『別頭統記』によると、「未^レ知^三姓名^一遠州浜名郡新池^{ナリ}邑主⁽²⁴⁾」としつゝも、鎌倉で金原法橋と医を通じて交りをつ結んだことや、宗祖からは厚い教化を受けたこと、更にその妻も落髮して新池尼となつたことが記されている。また『扶老』には「具^ニ新池左衛門殿^一云^ニベキ歟^一」⁽²⁵⁾とあり、『健鈔』には「八木鈔」の題号で「遠江国人也」⁽²⁶⁾と簡略に記されているのみである。即ち「八木三石送給候。今一乗妙法蓮華經の御宝前に備へ奉りて、南無妙法蓮華經と只一遍唱へまいらせ候畢。」⁽²⁷⁾という書き出しで始つてゐるため、「八木鈔」と呼ばれるに至つたのであるが、この「法華經の御宝前」に注目したい。法華經に對する供養が強調されている御書は他にもあるが、爰では明確に御供養の米を法華經の御宝前に備へ奉つたというのであるから、前にも少しくふれたように、西谷草庵の本尊勸請は、立像の釈尊像の前に、法華經が安置されるという形式をとつてゐたことがわかる。

さて「いとをしみの御子を、靈山淨土へ決定無有疑と送りまいらせんがため也。」とあるので、新池殿は最愛の子

を失い、その供養として米を送って来たことがわかる。この靈山淨土は云うまでもなく後生善処としての淨土を指しているが、「余宗の人々は念仏者・真言等に随へられ、何れともなければ、つよきに随ひ多分に押されて、阿弥陀仏を本尊とせり。現在の主師親たる釈迦仏を閑きて、他人たる阿弥陀仏の十萬億の他國へにげ行くべきよしをねがはせ給ひ候。」とある点からすれば、三徳を兼備した釈尊をもって本尊とすべきであり、更に西方十萬億の極樂淨土へ逃げ行くことを「愚なる人々実と思ひて、物狂はしく金拍子をたたき、躍りはねて念仏を申し、親の國をばいとひ出でぬ」という状態になっていることを嘆かれ、謗法の業にひかれてゐることを指摘している。従つて

靈山淨土||主師親たる釈迦仏の國土・法華經行者の淨土(隨自意)

極樂淨土||阿弥陀仏の國土・十萬億の他國(隨他意)

「淨土」に対して右の如く、「現在の父たる釈迦仏」の國土をもって「靈山淨土」とし、これを重んじ、「不孝の失」からまぬがれるべきであるという立場を示している。爰では破邪の対象を専ら淨土・真言におきつつ、宗祖の立場が示されているが、これは対告衆が比較的新しい信者であるため、法華經と諸經との勝劣を中心に、八權実相對Vを説かれたものとも考えられる。故に成仏についても前文では、亡った御子については靈山淨土へ「送りまいらせんがため」の法華經の功德が説かれ、後半には「法華經は仏説也、仏智也、一字一点も是を深く信すれば我身即仏となる。」というように現在の法華經信者は、「我身即仏」たりうると説き、ここでも現安と後善の兩説を示しているのである。「毒藥變じて藥となり、衆生變じて仏となる、故に妙法と申す。」というところに、三説超過の妙法と、「我身即仏」の究極を端的に顯したものとみなしえよう。

ところで新池氏は、以前に西谷を訪れ、宗祖の教化をえていた人であつたことは、此の御書の末文から推しても考

えられる。宿世では父母が兄弟であつたかもしれないと述べ、更に「世間ひまなき人の公事のひまに思ひ出させ給ひけるやらん。」とあるので、新池氏は公事も多忙な身の上であつたことが知れるのであり、身分も或る程度高い人であつたことがわかる。即ち、新池氏が身延山を訪問し、宗祖から親しく教えを受けて帰宅し、改めてその御礼と子の追善供養のために、米三石を奉納して来たことに対する御礼状が、本書である。最後に身延山への交通状況や、地理的環境が、久し振りに記されている。

「遠江国より甲州波木井の郷身延山へは道三百余里に及べり。宿々のいぶせさ、嶺に昇れば日月をいただき、谷へ上れば穴へ入るかと覚ゆ。河の水は矢を射るが如く早し。大石ながれて人馬むかひ難し。船あやうくして紙を水にひたせるが如し。男は山かつ、女は山母やまははの如し。道は繩の如くほそく、木は草の如くしげし。かかる所へ尋ね入らせ給ひて候事、何なる宿習なるらん。釈迦しやくわ仏は御手を引き、帝釈は馬となり、梵王は身に随ひ、日月は眼となりかはらせ給ひて入らせ給ひけるにや。ありがたしありがたし。⁽²⁹⁾」

旅程の「三百余里」については、当時と現在とでは換算上に相違があるので、三百という数にこだわる必要はないと考えられるが、身延山への道路条件、旅行機関は、まことに不便な状況であつたことが知れよう。こうした「人馬むかひ難し」という山へ、わざわざ登って宗祖に対面し、教化を得ている点からみても、単に通り一遍の信徒ではなかつたろうと考えられる。尚、こうした表現は他書にも類似したところもあるが、「事多しと申せども、此程風おこりて身苦しく候間、留め候畢んぬ。」という言葉で結んでいる点から推して、宗祖はこの頃、風邪で身体しんたいの調子は苦しい状態であつたことがわかる。風邪熱の身を押して長文の御返事を記されているのは、やはり新池氏に対する宗祖の心情が、深いものであつたことを証するものともいえよう。

五月四日には駿州の窪尼御前から、故入道殿への御供養の品々が届けられた。窪尼については、弘安元年の項で既に述べた如くであるが、爰では供養の功德を賞し、更に「法華経は仏にまさらせ給ふ事、星と月ともしびと日とのごとし⁽³¹⁾」とあって、一応の八法仏相對√を示している。

十三日には一紙五行の断片『一大事御書』があり、十七日には富木氏から「白小袖一・薄墨染衣一・同色の袈裟一帖・驚目一貫文」が送られて来た。宗祖はまだ身体の調子がわるく、所勞がつり、思わしくない健康状態のままであったが、その送り状に「本門久成の教主釈尊奉⁽³²⁾造、脇士には久成地涌の四菩薩を造立し奉るべしと兼て聴聞仕候き。然れば如⁽³²⁾、⁽³²⁾聴聞、者何の時乎云云。」という質問が記されてあったので、これに對し宗祖は、「かたがた不審なりし間、法華経の文を拜見し奉りしかば其旨顯然也。」として「今末法に入れば尤も仏の金言の如きんは、造るべき時なれば本仏本脇士造り奉るべき時」であることを論述している。即ち本門の教主釈尊に對して、脇士たる本化上行等の四大菩薩を造立すべき旨を明らかにしている。従つて本書は『四菩薩造立鈔』といわれているが、後段では大田方の人々が本迹勝劣を主張したことにふれ、「是は以ての外の謬也」⁽³³⁾と否定している。「一向に本門の時なればとて迹門を捨つべきにあらず。(乃至)今の時は正には本門。傍には迹門也」⁽³³⁾という立場を示している。恐らくは太田乗明の関係者の中には、本迹相對から迹門を輕視し捨て去らうとする考え方があったものとみられる。

また「日行房死去の事、不便に候。」とある。三位房日行については『考文』によると「曾谷直秀之弟」⁽³⁴⁾と云い、又『年譜考異』の説を受けて、大進阿闍梨と関連させている。⁽³⁵⁾『啓蒙』でも大進房と共に三位房は、元宗祖の弟子であったが、「不覺悟ノ者」として一時退転して行ったものの如くである。⁽³⁶⁾

最後に「身の所勞いまだきらきら(快然)しからず候間、令⁽³⁷⁾省略候」とあるので、この頃の宗祖の健康状態をは

ぼ知ることができる。

こうした中で、六月三日には松野殿女房から、「麦一箱・いゝのいも一籠・うり一籠等」の品々を送られて来た。その返事は二十日になって記されている。宗祖は従来、檀信徒からの御供養を受けると、直にその手で返礼の書を出しているが、恐らくこのように延びたのは、前書にもある通り、所労が快然としていなかった為と思われる。さてこの書は身延の所在を地理的にわかりやすく説明し、更に靈鷲山や天台山とも肩を並べる靈山として、△身延靈山▽の説に大きく近づいている。即ち

「此身延の沢と申す処は甲斐国飯井野御牧三箇郷の内、波木井の郷の戊亥の隅にあたりて候。(乃至)天竺の靈山此処に來れり、唐土の天台山親まろしたりここに見る。我が身は釈迦仏にあらず、天台大師にてはなけれども、まかるまかる昼夜に法華經をよみ、朝暮に摩訶止觀を談ずれば、靈山淨土にも相似たり、天台山にも異なうず。」⁽³⁸⁾

とある。「三箇郷」については、塩田義遜博士は「波木井氏の領した飯野御牧は南部御牧の東北の一部で、波木井・大野・小田船原の地であった」⁽³⁹⁾としている。これに対し松木本興教授は、「当時の波木井ノ郷といふのは今の身延町の大部分を総称したもの」とみなし、「飯野御牧は寧ろ八ッ岳山麓方面に離れて在ったものと推定する」説を立ている。⁽⁴⁰⁾いずれも確証となるものはなく、推定であるが「波木井の郷の戊亥」に當って西谷が在ったことには間違いないようである。「天竺の靈山此処に來れり」という表現は、明らかに靈山と身延山とを同一に視ていた現れであり。「靈山淨土にも相似たり」の語が、一層それを強いものとしていよう。又この一文から宗祖は西谷で機会ある毎に法華經の読誦や止觀の講談が続けられていたことがわかる。

七月に入って二十七日には、「乗明上人一石送三山中」⁽⁴¹⁾。得レ福過ムコトツキ十号功德。恐々謹言」という一紙三行の『乗明

上人御返事』が見られる。また日は定かではないが、六月に「比丘尼日符」と、七月に「沙門日法」へ曼荼羅本尊が授与されている。⁽⁴²⁾ 日法は甲州立正寺の開山であるが、この真蹟は岡宮の光長寺にある。

八月八日に、「鶯目一貫・塩一俵・蹲いぢし鴨一俵・はじかみ少々」が上野殿から届けられた。その御返事に「法華經は草木を仏となし給ふ。いわうや心あらん人をや」と草木成仏に寄せて一切皆成を説いている。⁽⁴³⁾

十七日には曾谷殿から、焼米二俵が奉納されて来た。その御返事によると、「抑貴邊きへの去さ三月の御仏事に鶯目其数有しかば、今年一百よ人の人を山中にやしなひて、十二時の法華經をよましめ談義して候ぞ。」⁽⁴⁴⁾

とある。従つて今年は施主曾谷氏の願により百余名の人々によつて、読誦講説がおこなわれていたことになる。これは恐らく草庵の建築様式の上から考えても、一時に百人以上の収容はむずかしく、また六月二十日付の前書『松野殿女房御返事』には、「著されば風身にしみ、食くらされば命持すがたし、(乃至)既に法華經読誦の音も絶ぬべし」という状態から推してみると、百余人を一時に養うことは困難であり、「今年」に入つてからの延人員ともいえよう。最後に「故大進阿闍梨の事なげかしく候」とある。この大進阿闍梨については、既に前書の『四菩薩造立鈔』に於て、「日行房」のところであつた通りであるが、古来、△大進房▽と△大進阿闍梨▽を、別人として考える説と、同一人として考える説とがあり、⁽⁴⁶⁾ 一定していない。しかし祖書中には大進房とあるのは、『聖人御難事』他一篇であるのに対し、大進阿闍梨とあるのは本書や『辨殿御消息』など七篇に及んでいる。三位房日行と大進房等は共に中途からの退転者であるが、『聖人御難事』(後出)には、「大進房が落馬等は法華經の間のあらわるるか」とあり、⁽⁴⁷⁾ 本書には大進阿闍梨の事を「此又法華經流布出来すべき因縁にてや候らん、とをばしめすべし。」⁽⁴⁸⁾ とあるので、大進阿闍梨については、なげかわしいことであるが、法華經流布の時代に出来すべき因縁であるとおぼしめすように、とい

う文面上からみて、どうやら同一人ではないかとも考えられる。三位房も大進阿闍梨も共に曾谷氏の關係を引く人々であつたので、爰ではあからさまにいわず、上記のような表現になつたのかもしれない。

〔註〕

- (1) 「日本宗教史年表」(笠原一男編) 一〇七頁
- (2) 「望月仏教大辞典」第六卷 二七七頁
- (3) 上野殿御返事(昭和定本遺文) 一六二頁
- (4) 不輟品(岩波文庫・法華經) 一三四頁
- (5) 上野郷主等御返事 一六二頁
- (6) 拙論「阿仏房について」(印度學仏教學研究)第二六卷第一号を参照されたい。阿仏房の場合と同様のことが云えよう。
- (7) 「棲神」第四十六号の拙論「身延山初期における日蓮聖人」を参照されたい。 三三頁
- (8) 日眼女釈迦仏供養事 一六三頁
- (9) 方便品(岩波文庫・法華經)(上) 一一四頁
- (10) 「録外考文」卷三 十一頁
- (11) 孝子御書 一六二六頁
- (12) 「御本尊集目錄」(山中喜八編) 九〇、九二頁
- (13) 松野殿後家尼御前御返事 一六三一頁
- (14) 撰時抄 一〇六一頁
- (15) 「御本尊集目錄」(山中喜八編) 九二、九五頁
- (16) 「高祖年譜」 四五頁
- (17) 「録外考文」 三一頁
- (18) 上野殿御返事 一六三二頁
- (19) 同 一六三五頁
- (20) 開目抄 五五九頁
- (21) 上野殿御返事 一六三四頁
- (22) 開目抄 六〇一頁
- (23) 陰徳陽報御書 一六三八頁
- (24) 「別頭統紀」 卷二四—二二頁

(25)	「録内扶老」	卷一五―二頁
(26)	「御書鈔」	卷二五―二四頁
(27)	新池殿御消息	一六三九頁
(28)	同	一六四一頁
(29)	同	一六四四頁
(30)	『棲神』第四八号五九頁を参照されたい。	
(31)	窪尼御前御返事	一六四五頁
(32)	四菩薩造立鈔	一六四七頁
(33)	同	一六四九頁
(34)	「録外考文」	卷五―六九頁
(35)	同	卷四―四七頁
(36)	「録内啓蒙」	三三―一二七頁
(37)	松野殿女房御返事	一六五一頁
(38)	同	一六五一頁
(39)	『日蓮聖人の生涯』(塩田義遜著)	一七二頁
(40)	『身延のお祖師様』(松木本興著)	一九頁
(41)	乗明上人御返事	一六五二頁
(42)	『御本尊集目録』(山中喜八編)	九六―九八頁
(43)	上野殿御返事	一六五三頁
(44)	曾谷殿御返事	一六五四頁
(45)	松野殿女房御返事	一六五一頁
(46)	『日蓮聖人御遺文講義』第一八卷	三四八頁以下参照
(47)	聖人御難事	一六七三頁
(48)	曾谷殿御返事	一六六四頁